

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

敗戦後

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

敗戦後

大川周明戦後文集

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

敗戦後

大川周明戦後文集

目次

天照開闢の道	14
市ヶ谷の楽天囚人	37
アプレ雑談	63
日本精神への復帰	89
二人の法華経行者 石原莞爾將軍と北一輝君	102
鎌倉仏教は何を教えるか	132
病中消息	150

大川周明について

158

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

(昭和二十〇一九四五年九月二十一日 大川周明発・金内良輔宛書簡)

肅啓 懇ろなる玉簡難ありがたく有つ拜見つかまつり仕候。此度の敗戦は軍閥が八紘一字の神

勅や大稜威を覇業の道具に振廻ふりまわしたる神罰と被ぞんぜられ存候へバ、小生の如く之を熟知

しながら制止し得ざりし者は如何なる刑罰をも甘受つかまつるべくたし可仕、仮令米国のために

銃殺せらるる如きことありとも、之によりて皇天に対する国民の罪の一端を購う

ことを得ば、最後の奉公と満足つかまつるべく可仕候。従つて戦争責任者云々の件はどう

ぞ御放心被下くだされたく度候。

日本も向後暫くは米国式蘇聯ソソ式思想横溢し社会的混乱も必至と被ぞんぜられ存候へど、

結局は日本的特質を堅持して、米の科学的能率主義、露の組織性を摂取する国民

的前衛の指導的活動によりて、復興の一路を辿るべしと被ぞんぜられ存候。

日本人は民族としては不思議に原始の新鮮を保持し来きたりしも、社会は完全に老

類仕居候へバ、此の非常の機会に若返りのための大手術を必要とすべく、早晚自

然発生的か有意的か、此事行はれずば止むまじく候。匆々不

九月念一

周明

金内兄 玉案下

(昭和三十一年一月一日 大川周明発・中村武彦宛書簡)

肅覆 臘卅附雲箋元日飛到有難く拜見しました。私は亡国日本の残骸の跡始末は総じて之を葬人足諸君に委ね、東北の片田舎を回りに新瑞穂国の土台固めに専念して居ります。本年も二月中旬から田舎行脚を始めます。屋根は破れ柱は傾き土台は崩れかけたこの廃屋に手入れして、米国風・ロシア風・乃至明治日本風の家屋に建て直そうとする自由主義者・共産主義者・日本主義者の努力は今の私には関心を有てませぬ。私の志すところは「救国」ではなく「立国」です。たつた一字の相違ですが、住んで居る世界が違ふのですから実は白雲万里の懸隔です。私は過去の一切を亡国日本と共に棄て去り新しい大川として生き始めたので、日本の残骸には微塵の末練も残さず、唯々新瑞穂国の土台を農村に築こうと一心に努めて居るだけです。従つて吉田が退き鳩山が出るといふやうな出来事は、葬式の人足頭の更代としか感じません。吾兄等のやうに必死になつて吉田打倒を絶叫するのは凡そ縁遠い人間になりました。吾兄は私を過去の大川と思つて色々の注文なり評価なりをして居ること、存じますが、昔の大川は最早現実界には居りませぬ。今の大川は百姓相手に田舎廻りして丹念に立国の土台を積み上げる以外

に何の芸当もない人間です。私の生理的年齡は古稀に達しましたが、生れかわつてから幾年も経たないのだから思想も感情も幼少時代に逆転しました。いま私は少年のころ、即ち吾々の祖先が天孫に御伴して此国土に降臨し稻を栽培し初めた時の單純幼稚な心で、新瑞穂国建立に夢中になつて居るのです。私は吾兄を心底から敬愛します。八千矛を読む毎に旧大川の四十歳前後の姿そつくり其儘ままに認めて、いつでも微笑を禁じ得ませぬ。従つて吾兄の心事は充分に領会でできます。私の国造りの仕事が進めば、私は設たひ吾兄が別の世界に住んで居ても出来るだけの加勢をしたいと考へて居ます。そして屹度きつと出来る時が来ると思ひます。但しそれは文章や言論での加勢ではありません。依て此度の御注文はお断りです。

昭和卅年一月一日夜

周明

中村兄 請安

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

敗
戦
後

大川周明戦後文集

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- 一、本書は大川周明が「戦後」に雑誌上で公表した文章を集め、書肆心水が一書となして刊行するものであり、大川周明自身がこの本のかたちで刊行したものではない。
- 一、本書の表記は、新漢字・新仮名遣いとした。ただし古文引用の仮名遣いは（その古文のオリジナルな原文が漢文である場合も）そのままに表記した。旧字体ではなく別体扱いの漢字は、固有名詞中の場合は原文のままに表記し（例、養／養）、そうでない場合は標準字体で表記した（例、翻／翻）。廿、卅は例外的処理として二十、三十と表記した。
- 一、読み仮名ルビは適宜付加した。原文の読み仮名ルビは全ていかしてある。
- 一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。
- 一、現今一般の感覚で過不足を強く感じるだろう送り仮名は現代的に処理した（例、遠とほかる↓遠とほざる）。
- 一、記述の正誤を判断しかねる場合などに使用する「ママ」のルビは丸括弧で括って表記した。
- 一、話題が重複しているところがあるが、部分的省略はせず、全てそのままに採録した。
- 一、現今一般的に漢字表記されないものは仮名表記に置き換えた（古文引用はそのまま）。
- 一、ただし、而して（しかして／そして）の場合のように幾とおりかの読みがある場合は仮名にせず、読み仮名ルビを附した。仮名表記に置き換えたものは五十音順に次のとおり（活用語尾と送り仮名は代表例のみ）。

SAMPLE SHONIN.com

亜米利加(↓アメリカ)、雖も(↓いえども)、愈々(↓いよいよ)、印度(↓インド)、斯かる(↓かかる)、斯くの(↓かくの)、希臘(↓ギリシャ)、基督(↓キリスト)、茲(↓ここ)、此の(↓この)、之(↓これ)、此(↓これ)、是れ(↓これ)、併し(↓しかし)、乍併(↓しかしながら)、而も(↓しかも)、屢々(↓しばしば)、其の(↓その)、其(↓それ)、夫れ(↓それ)、度い(↓たい)、畜に(↓ただに)、忽ち(↓たちまち)、設い(↓たとい)、竟に(↓ついに)、乃至(↓ないし)、乍ら(↓ながら)、亦(↓また)、儘(↓まま)、若し(↓もし)、猶太(↓ユダヤ)、羅馬(↓ローマ)、態々(↓わざわざ)一、巻頭にエピグラフ風に掲げた手紙二通は『大川周明関係文書』(一九九八年芙蓉書房出版)より引用した。

一、収録各篇は次の雑誌に掲載されたものである。

1. 「天照開闢の道」——『綜合文化』第一卷第三号(一九五五年七月)
2. 「市ヶ谷の楽天四人」——『文藝春秋』第三十二卷第十六号・臨増(一九五四年十月)
3. 「アプレ雑談」——『毎日情報』第六卷第十号(一九五一年十月)
4. 「日本精神への復帰」——『警察時報』第八卷第二号(一九五三年二月)
5. 「二人の法華経行者」——『改造』第三十二卷第十二号(一九五一年十一月)
6. 「鎌倉仏教は何を教えるか」——『宗教公論』第二十二卷第三号(一九五二年四月)
7. 「病中消息」——『不二』第十二卷第十号(一九五七年十一月)

天照開闢の道

—

世間は私を右翼と呼ぶ。時には右翼の巨頭などとも呼ぶ。右翼とは左翼に対しての言葉である。左翼とは何か。それは共産主義者又は社会主義者のことである。共産主義と最も極端に対立するものは何か。それは資本主義である。果して然らば資本主義者又は財閥こそ、まさしく右翼と呼ばれるべきではないか。私は年少のころ社会主義に傾倒したことはあるが、未だ曾て資本主義や財閥を謳歌した覚えはない。従って私を右翼と呼ぶことは正当でない。

私は反共産主義者でもなく反資本主義者でもない。強いて云えば非資本主義者で

天照開闢の道

あり、非共産主義者であり、一層適切に云えば非主義者である。私は一切の「主義」なるものを奉じない。凡そ如何なる思想でも、主義としてこれを固執すれば、必ず世に害毒を流すようになる。主義とは人間の生活内容を統一するに適當なる立場のことである。人生は不断に流動して息むことを知らない。従つて統一に適當する立場も、また時により場合に依じて変らざるを得ない。事ある時は軍国主義、事なき時は平和主義、国貧しければ産業主義、国豊かなれば文化主義総じて個人又は國民がそれぞれの場合に依じて取捨する立場である。然るにそれ等の立場の一つだけを万古不易の真理なるかのように主張して自余一切の立場を排撃することは、頭腦のはたらきが器械的であること、また我執の強いことから起る。それ故に主義の標榜は常に一種の挑戦である。

孔子は「君子は和して同せず、小人は同して和せず」と云つた。同ずるとは一つの主義を固執することである。従つて同は不同の存在を許さない。同は必ず不同を排撃する。それ故に同は常に抗争を伴う。然るに和とは如何なる主義にも拘泥せぬことである。それは同を同とし、不同を不同として、それ等両者の同時存在を許し、

そのいづれをも非とせぬ態度である。それ故に同が抗争の上に立つに對して、和は常に非抗争の上に立つ。聖徳太子は、その憲法第一条に「和を以て貴しとなし、忤さからなきを宗とす」と明記して、神道・儒教・仏教のいづれをも排斥せず、三者を等しく国民生活の統一に役立しめた。

和は謂わゆる折衷でない。また妥協でもない。如何に況いはんや附和雷同でない。それは同と不同とを無差別に羅列し混淆することでない。和とは同と不同との差異を明瞭に認識しながらそれ等両者を共存させること、同に同じながら不同を排斥せぬこと、即ち異に「忤さからわぬ」ことである。かくすることは、同と不同とを十分に認識し、理解し、且つ批判して、それぞれ人生に於てその所を得させることによつてのみ可能である。例えば聖徳太子の場合に於ては、中国精神並びにインド精神の徹底せる理解との確なる批判とがあつたればこそ、儒教仏教を排斥することなく、神道によつて政治の根本義を確立した上に、儒教による道徳の向上、仏教による信仰の向深のために、それぞれこれを国民生活の適切なる局面に按配し、最も見事なる「和」を実現した。而してこれによつて当時日本が直面せる深刻無比なる問題に、

天照開闢の道

水際立って鮮かなる解決を与えたのみならず、将来日本が進むべき根本動向を確立した。もし聖徳太子が、物部党の如く神道を唯一の主義として固執し、異に「忤う」立場を取って中国並びにインドの影響を拒否したならば、当時の日本の政治界並びに精神界は惨憺たる混乱に陥ったであろうし、また日本文化の向上登高の路も阻まれたことであろう。

世間には日本主義などと唱えて、一切の異邦的なるものを排斥する人々があり、私自身もそれ等の一人に算えられることがある。しかしながら聖徳太子の例を見ても明瞭であるように、日本は決して異邦的なるものを拒否することはない。日本主義などと標榜するそれ自身が、既に「同」に執着する物部党の精神であり、忤うなきを宗とする日本伝統の精神と相距る白雲万里である。私は日本の正統精神に生きようとする者であるから、未だ曾て日本主義などと標榜したことがない。論より証拠、私は曾ては箕田胸喜氏一党の所謂日本主義者から、非日本の思想の持主として激しく忤われた。三浦義一氏の門下生からは皇室をなみする者として不敬罪で告訴された。現に日本随一の愛国者福田素顕先生からは、不埒至極なる国賊と筆誅され通し

である。

日本に生れた以上、私が日本的に感じ、日本的に思い、日本的に行おうと心懸けるのは、日本人として当然至極のことで、決して取立てて日本主義などと呼ぶべきものでなく、唯だ天地自然の道理に従って生きるだけである。しかしながら日本的なるものを唯一無上の真理として、これを異邦的なるものと対立させ、これを他国又は世界全体に強制しようとしたり、すべて他国のものを排斥したりする時に、それは取りも直さず日本主義となる。私は異邦的なるものを単に異邦的なるが故に排斥しようと思わないし、また日本的なるものを他国に強制しようとも思わないから、決して日本主義者ではない。

七年に亘りて被占領日本に君臨せるマッカーサーは『マッカーサーの鍵』の著者ガンサーに向って、その占領目的は日本の「全国家・全文化」の米国化であると豪語して居る。米国人が米国流に振舞うことには毛頭異存ないが、もし米国人が米国の文化のみが真個の文化であるとして、米国的デモクラシーを他国に強制するならば、それは直ちに忌むべく斥くべき米国主義となる。

天照開闢の道

すべての国家は、これを構成する民族の性情を經とし、その独自の歴史を緯とする組織体なるが故に松には松の樹容あり、杉には杉の樹容あるように、それぞれ固有の面目を有し、それぞれ理想を異にして居る、それは決して甲乙丙丁の国々が、強いて互いに他国と異ならんと努めたために生じた差別でなく、柳の自ら緑に、花の自ら紅なる如く、各国それぞれ自国の理想を奉じて国歩を進め往く間に、自然に生れた差別である。それ故にマッカーサーが、日本の全国家・全文化を挙げて米国化しようとするのは、松を地上から絶滅させて、杉のみを榮えさせようとするに等しい荒涼の沙汰である。

朝鮮人及び台湾人は、人種的にも文化的にも最も日本人と親近なる民族である。それにも拘らず日本主義を以てこれに臨むことの非なるは、謂わゆる皇民化の失敗がこれを立証する。拮据経営数十年の後に、満腔の善意を以て行われた皇民化さえ、結局は善意の悪政に終り、折角の善意も独善のそしりを免れなかったとすれば、米國とは民族の性情も歴史も対蹠的に違つて居る日本を、短兵急に米國化し得るものと考えたことはマッカーサーの途方もない誤算である。日本主義が非なると同様

に、米国主義もまた非である。すでに述べたように、主義の標榜は常に一種の挑戦である。従って米国が米国主義を以て日本に臨むことは、取りも直さず日本に対する挑戦なるが故に、日本人の反米感情を誘発することは当然至極の因果である。

明治天皇の御製にも「善きを取り悪きを捨ててとつ国の」とあるように、吾々は決して異国のものを排斥せず、その善きものは欣んでこれを学び取る。それは日本文化の内容を一層豊富ならしめ、日本国家の本質を一層高貴ならしめるためであり、一切の取捨選択の主体は日本自身である。然るにマッカーサーが日本の「全国家・全文化」を米国化せんと豪語したことは、日本の国家と文化とを一顧の価値なきものとして、日本の主体性を全面的に否定し、結局日本そのものを地球の表面から抹殺し去らんとするに等しい。魂を米国に売渡せる者を除けば、日本人は決してかくの如き無理非道に屈従するものでない。もし米国人が占領下日本のジャーナリズムに氾濫せる米国礼讃論や日本嘲弄論を読んで、それが真実の日本人の声であると早合点するならば、それは甚だしく危険なる誤解である。善意にせよ悪意にせよ、意識的にせよ無意識的にせよ、日本を米国よりも劣等なるものとして、日本を米国化し

天照開闢の道

去らんとする米國主義は、日本そのものに対する挑戦なるが故に、かような主義を捨てざる限り、眞実なる日米親善は断じて望むべくもない。何となればかかる米國主義は、必然排外独善の日本主義を誘発するからである。

二

徹底して日本を米國化することは、マッカーサー並びに彼に忠勤を励んだ日本の指導層が考えたように、しかく容易な仕事でない。なるほど表面だけを見れば、日本の米國化は西歐流のレジスタンスもなく、驚くべき速度を以て進められた。国民生活のあらゆる方面に於て、日本的なるものは一時殆どその影を潜めた。日本を樹木に譬えて云えば、恰も天然自然の枝や葉が手当り放題に截り取られ、その代りに米國製の枝や葉が取りつけられたような奇妙な姿となったが、深く大地の中に潜む根までは害い^{そこた}尽されなかつた。そして取りつけられた枝や葉が風雨のために色あせ往くに引換えて、天然自然の枝や葉が再び芽生え初めようとする。

日本の米國化政策遂行に際し、破壊の主力が、あらゆる日本的なるものうち最

も日本的なるものに向って注がれたことは云うまでもない。最も日本的なるものは何か。それは皇室と神社、並びに皇室と神社と国民の結合である。この目的のために紀元節の廃止、神武天皇の抹殺、人間天皇の宣伝、御真影の撤廃、御真影奉安殿の破毀、国史教育の抛棄、国家と神社の分離による神社自滅政策、神社の団体参拝禁止、その他一連の破壊工作が矢継早やに強行された。学者とジャーナリズムがこれに呼応して、天皇や皇室に対する悪罵が得意気に叫び立てられ、神社崇拜は迷信と嘲られた。新聞を読み、ラジオを聴いただけでは、最も日本的なる二つのものが全く抹殺されたかに思われた。

試みに伊勢神宮の例を見よ。総ての日本人の魂の故郷である伊勢神宮は、昔ながらの定制によって、昭和二十四年に式年遷宮が行われる筈であった。そして昭和十四年から造神宮使庁で造営の準備を進めて居たのであるが、敗戦の昭和二十年十二月十四日、陛下は式年遷宮の無期延期を仰出され、その翌十五日、占領軍総司令官の所謂神道指令が発布せられ、国費による神宮造営は不可能となり、翌昭和二十一年一月三十一日、造神宮使庁も廃止された。

天照開闢の道

然るに後生大事に占領軍の意図を遵奉する政府の方針、学校の教育、学者の言論、ジャーナリズムの宣伝は依然として旧の如くなるに拘らず、皇室と神社に属する敬慕の情が、一旦は洩れ果てたかに見えた泉の底から再び清水が湧き出るように、いつとはなく国民の魂によみがえって来た。巡幸に際して陛下の奉送迎も次第に礼儀正しくなった。年頭の皇居参拝者の数は年と共に激増した。昨年正月二日の年参賀に死者十六名、重軽傷者六十余名を出したのは、当局が斯程^かまで多数の参拝者あるとは夢想だもせず、従って整理警備の手配を些かも講じて居なかつたからである。国民は貞明皇后の崩御、秩父宮の薨去を心の底から哀悼した。真ごころ籠めて立太子礼を奉祝し、殿下の外遊に際しては至心に無事安泰を祈願した。

神社参拝者の数も年々増して来る。伊勢神宮や明治神宮は云うも更なり、全国津々浦々の神社、一として年頭参拝者に賑わざるはない。この神を敬うこころの復活を最も鮮明且つ強力に立証したのが、実に一昨年十月初旬に芽出たく執行された伊勢神宮の遷宮である。赤旗街頭を押し、陛下を天ちゃんと呼び、メーデーに米よこせと、皇居に乱入し鳥居を描いた茶碗を人目につかぬところに陰した小心者さえ

あつたところに、無期限に延期され、数億円の巨費を要する神宮造営が、定例の式年遷宮より僅かに四年遅れただけで見事に完成されようとは、恐らく何人も想い及ばぬところであつた。その不可能事が、占領軍の圧迫、政府の冷淡極まる態度、学者やジャーナリズムの嘲笑の下に、全く国民自身の敬虔と精進とによって可能とされたのである、日本のインテリは、占領下のフランス人がドイツに対して抗争せるレジスタンスを礼讃する。しかも伊勢神宮遷宮の実現こそは、占領軍の非日本化政策に対する日本国民の聖なるレジスタンスであることに気付かない。ガンデイの真理護持運動は、余りにも西欧の政治運動と面目を異にして居たので、当初英国人はこれを恐るべき革命運動とは思わず、却って軽侮の感を抱いて居た。同様に神宮造営運動も、如何なる抗争意識を伴わず、祈願と至誠とによって成就された点に於て、西欧のそれとは全く面目を異にするレジスタンスである。遷宮祭が厳肅且つ盛大に行われた時、私は野村望東尼が獄中で咏んだ下の一首を想起した――

暗き夜はなほ暗けれど鶏の

鳴けば心ぞ先ず明けにける

天照開闢の道

まことに国民の敬虔と精進との結実である遷宮祭は、天の岩戸の前で鳴いた常世とこよの長鳴鳥の声である。それは夜空に輝き来れる星影漸く光薄らぎ、やがて昇天する日輪が、はやくも東天を紅に染め初めたあとを告げる。本立って生成る。占領下に蹂躪された総ての日本的なるものうち、最も日本的なるものが最初に見事によみがえったあとは、日本のその他の善きものが、やがてつぎつぎによみがえるべきことを堅く約束する。

私は二十年前に一読して強く心をうたれたブルーノ・タウトの言葉を想起し、書架からその著『ニッポン』を採り出した。私は久し振りにこれを再読して、以前よりも一層強く感動した。この偉大なるドイツの建築家は、伊勢神宮について下のようを書いて居る――

「日本が世界に贈れる総てのものの根源、全く独自なる日本文化の鍵、全世界が讚嘆する完全なる形式を備えた日本の根源――内宮・外宮・荒祭宮の諸宮を擁する（伊勢）こそは、実にそれ等の一切である。」

「これ等の建造物は、それに献げられる尊崇の念が不思議に思われるほど簡素を極

めて居る。それは農家を想起させるものがあり、田圃の真中に藁葺の極めて素朴を見ると、伊勢のあの古典的建築が、本質的には同じものであるとの印象を受ける。而してこの一事こそその古典的偉大なのである。あの建造物は、日本の国土から、日本の土壌から生い立ったものであり、謂わば稲田の作事小屋や農家の結晶であり、その神殿即ち国土とその大地の安置所なのである。」

「国民はそれを国民の最高象徴として尊崇する。この点でそれはその結晶体である。その構造は完全に澄明で些かの曇りもなく、外形がそのまま構造であるほど開放的で簡素である。同様に、香高く美しい檜材、屋根に用いられて居る藁、屋上木部末端にある金冠、そして最後に建造物の土台となって居る整然たる礎石、総てこれ等の材料は飽く迄純潔を極め、あらゆる点で簡素である。木材は油を施されて居ない。かように単純であるに拘らず、材料と構造とが、他に比類すべきものがないほどの均整を以て組合わされて居る。わけでも外宮がそうである。一切が窮極の清純である。それは日本的形態の偉大な神秘を、その世界独歩の力をその中に蔵する高貴なる結晶体が、初めて現し得る高貴さである。」

天照開闢の道

「日本の文化が世界のあらゆる民族に寄与せるものに対して、多少なりとも心を動かされる人は、親しく伊勢に詣でねばならぬ。そこには日本文化のあらゆる特質が一つに結晶して居り、それ故に単なる国民的生地である以上の何者かが見出される。外宮を有てる伊勢は、一言にして言えば、実に建築術の神殿である」。

崇神天皇第六年、初めて大和の笠縫邑に皇大神宮を拝祀してから六十八年の間に、鎮座の地を遷すこと十二ヶ国二十九ヶ所、遂に天照大神の啓示により、神風の伊勢の国、神路山の緑に包まれる五十鈴水上が永久の鎮座地と定められたのは、垂仁天皇第二十五年即ち今を距る約二千年の昔であり、この時の新宮は恐らく天皇の皇居になぞらえて造営されたものである。その後約五百年を経て、雄略天皇第二十二年、同じく天照大神の啓示により、豊受大神宮が丹波国真名井原から現在の山田に奉遷され、社殿は当時の皇大神宮の形式によって造営された。当初は遷宮に関する定制なく、恐らく建換を必要とする時に随時造営されたものと思われるが、天武天皇の時に始めて式年の制が定められ、次の持統天皇の時に最初の式年遷宮が行われ、爾来二十年毎に伊勢神宮は新たに造営されて今日に至った。しかも造営に当っては最

も厳格に古式が守られ、新旧寸分の相違なきを心懸けるので、二千年前の古い型が、常に新鮮なる姿を以て伝えられて来た。式年制度という独得にして崇高なる天武天皇の精神及びこれを堅く守り続けた国民の敬虔なる信仰は、まさしく驚くべき事実である。

唯一神明造と呼ばれる内外両宮及び別宮の正殿の建築様式は、三韓や中国の文化が未だ伝来せぬ以前に於て、ブルーン・タウトが看得せる如く、日本の国土から生い立った純乎として純なる日本の様式であり、単に一個の建造物として見ても、二千年以前に速くもかくの如き型態を創造したことは、少くとも日本国民性の深さと気高さとを物語る。ジョン・ラスキンは、ヴェニス歴史と芸術を叙述せる小冊子の巻頭で下のように述べて居る。曰く、或る国民の本質を知るための三つの道がある。その第一は国民の政治的・経済的・軍事的功業の歴史であり、その第二はその生める哲学学問であり、その第三はその創造せる芸術である。そしてこの三者のうち最も直截簡明に国民性を物語るものは芸術である。国民の外面的功業は、応々にして内面的国民精神以外のものによって影響されることがあり、また哲学や学問は、

天照開闢の道

多くの場合国民全体の所産というよりも、傑出せる個々の知識者の事業であり、必ずしもこれを以てその国民全体の知能の高さを測る物尺とはならない。然るに芸術は少くも或る程度まで国民全体又は多數者が、共に楽しみ味わうこと前提とし、多數国民と没交渉なる、全然個人主義的なる芸術はあり得ない。従って或る国民の特性を最もよく表現するものは、その功業の歴史や学問であるよりも、むしろ建築・彫刻・絵画・音楽などの芸術であると。ラスキンのこの見解は、伊勢神宮のように唯一人その最初の造営者の名を知る者もなき建築の場合に於て、わけても適切至極である。それは簡素を極め、純潔を極め清楚を極めタウトをしてその「究極のさやけさ」に於て世界無比と極言せしめた建築である。しかもその前に立つ者をして忝かたじけなさに涙を流さしめずば止まぬ建築である。そしてこの驚くべき建築は、一人のすぐれたる天才の創作ではなく、実に日本国民全体のこころの所産であり、従って日本精神そのものの最も如実なる象徴である。

SAMPLE
Shosha-Shinshu.com

三

二千六百年の日本歴史は、太平洋戦争の全敗によって不幸なる段落を告げた。国家の外形は、屋根は破れ柱は傾き、土台は崩れかけたままに残骸を留めて居るが、日本はもはや戦前の日本でない。このみじめな残骸は、亡国の廃屋である。その崩れかけた土台の上に残る廃屋を修繕してアメリカ風の文化住宅に改造しようとする自由主義者、一挙廃屋を叩きこわしてロシア風の家を建てようと焦る共産主義者、ないし戦前の日本家屋に復原しようと動き初めた日本主義者、総じてこれ等の「主義者」たちの努力は、所詮砂上に楼閣を築こうとするに等しい。砂上の楼閣でも、一時の雨露を凌ぐに役立つから、決して全然無用の骨折ではないが、一層大切なることは、新たに建てらるべき国家の礎を堅固に築き上げることである。

二宮尊徳翁が小田原藩主の委託を受けて、田野も人心も荒びはてた野州桜町の復興を引受けた時、藩主は多額の復興資金を下附しようとした。その時尊徳翁は、一両の下附金も頂戴したくないと答えた。この意外の返答を聞いた小田原藩主は、従

天照開闢の道

来巨額の金を注ぎ込んでも復興出来なかったものを、一文なしでやれるというのは何うした次第かと訊ねた。翁は下のように答えた――

「主君から金をお下しになると、役人も村人もその金に心奪われ、吾先にこれを手に入れようとする。そのために或は互に他人が不正をはたらいて居るように疑い合、或は腹の黒い者同士が結托して利を食う、人氣益々悪くなって復興の仕事は廃れてしまう。荒地を救うには荒地の力により、貧乏を救うには貧乏の力によらねばならぬ。わが日本の国土で行われた幾百万町歩の田野開拓は、決して外国から金銀を借りて行われたのではない。実に民草の一鍬一鍬が功を積んで成就したのである。いま荒廢した田野を復興しようとして先ず金銀を求めるのは、本末を顛倒するものである。日本国土開闢の初に当り、天照大神が自ら耕して食ひ、自ら織りて着ることを教え給うた大御心を体し、人々皆な誠実に勤勞するならば、資金なしに荒蕪を開拓することは断じて不可能でない。」

翁は「吾道は天地開闢の道なり」と言った。そして実にこの道によって、彼以前の幾多の指導者たちが、巨額の費用を使っても成就し得なかった桜町の復興を物の

見事に成就したのである。

現在の世界に於ける敗戦日本は、まさしく幕末日本に於ける桜町である。その復興は、桜町の場合と同じく、天照開闢の精神に復帰して誠実に勤労する以外に断じて別途ない。明けても暮れても外国からの借金と政府からの補助金に頼る日本及び日本人の現状を見よ。尊徳翁が指摘した通りの腐敗墮落が天下に充満し、いずれの方面を見渡しても、真実の復興のきざしは認められず、黒闇の色のみ濃くなりまさりつつあるではないか。「大日本帝国」は亡んだけれど、日本民族は滅びない。吾々は神武建国以前に溯り、天照開闢の本原に復帰して建国の第一歩を踏み出さねばならぬ。

国を建てるということは、民族がその生産を全うするために、民族の生活を組織立てることである。人間が生活の道を開くことを、「自然」に対して「文化」という。従って文化の基礎は生活の道を立てることであり、生活の道の最も根本的なものは衣食住である。生活の道即ち衣食住が確立して、その上に種々なる修飾が行われ行く。今日では学問や芸術や、政治や経済など、生活の道に於ける修飾の方面が

天照開闢の道

専ら文化的と呼ばれ、人々はそれ等のものの根柢に横たわる基礎を閑却して居る。如何に立派な家でも、必ず屋根と柱と土台がある。家の装飾は地中に隠れて居る土台あつてのことであるが、その肝心の土台が装飾のために蔽われて見えなくなつて居るのが日本の現状である。人々は堅確なる土台固めに全力を注ぐことを怠り、柱を飾り、敷物を選び、窓に美しい硝子をはめて文化文化と欣んで居る。人々が怠つて居るこの堅固なる土台を、吾々は懸命に築き上げねばならぬ。

家に必ず屋根・柱・土台があるように、生活の道即ち文化の根柢となつて居るのは衣・食・住であり、わけても食は家の土台に相当する。従つて吾々の建国は、先ず食の確保から始めねばならぬ。吾々の先祖が、稲を初め五穀の種子を天照大神から賜わり、自らの手でこの国土を開拓した精神を体得して、この国を瑞穂国の名にそむかぬものとする覚悟を以て始めねばならぬ。尊徳翁は「故道ふるみちに積もる木の葉をかきわけて、天照神の足跡を見む」と願つて居る。吾々が踏んで往こうとするのは、取りも直さずその足跡である。一切の日本的なるものうち最も日本的であり、民族の魂の故郷である伊勢神宮の遷宮が、国民自身の悲願と精進とによつて先ず実現

されたことは、深重なる示唆を吾々に与える。

日蓮上人曰く「法は必ず国をかんにみて弘むべし。彼国に好かりし法なれば、此国にも好かるべしとは思ふべからず」と。一切の文化部門のうち最も普遍的なるものは宗教である。その宗教でさえ尚且つ然りとすれば、相異なる民族性と独特なる歴史とを基盤とする社会制度、国家組織の如き、猶更「彼国に好ければ此国にも好し」と思つてはならぬ。日本の再建は、日本に内在する生氣が、敗戦と隷属との屈辱と試練との後に、新しい力を以て捲土重来する時にのみ初めて可能である。従つて今日の日本にとりて最も重要なことは、精神的に独立することである。占領下日本は、アメリカ追従かロシア礼讃に明け暮れて来た。平和条約締結以来、やや日本自身に復帰しようとする傾向を示して来たが、ジャーナリズムはこれを逆コースと呼ぶ。アメリカに追従することが正道であり、ロシアに倣うことが進歩であり、日本自身の面目に復帰することは反動であるとする考え方が、いまなお日本を支配しつつあることは日本が未だ精神的独立を回復して居らぬ証拠である。精神的独立なくしては、如何なる独立もあり得ない。吾々は敗戦以来外国から与えられた価値判

天照開闢の道

断の標準を、一応未練なく棄て去りて、取捨選択、すべて日本精神に則って行わねばならぬ。

人造海水は、その化学的成分に於て徹底して天然海水と同一であり、如何に精密に分析しても両者の間に相違を認めることができない。それにも拘らず人造海水に放たれた魚類は決して生氣を保ち得ないし、魚卵は決して孵化しない。然るにこれに若干の天然海水を加えれば、海魚を活かし、魚卵を孵化する生氣ある水となる。組織や制度に生氣を与えるものもまた民族精神であり、これなくして徒らに摸倣する制度や組織は人造海水に放された魚類や魚卵に等しい。見よ、魂を失える日本にアメリカが与えた思想や制度は、日本人の實際生活の上に殆ど全くその本来の意義が実現されず、却ってそれ等の思想や制度の末期的症状だけが歴然と露出されて居るではないか。

私は決してそれ等の思想や制度を排斥したり拒否したりするのではない。最初に述べたように、総ての外來思想や文化を包擁して、それぞれ適切なる位置を与え、これによって国民生活の内容を豊富ならしめ且つ向上登高せしめるのが、本来の日本

精神である。ニーチェは「偉大とは方向を与えること」だと言った。日本精神は総てのものに正しい方向を与えて来た点に於て、まさしく偉大である。しかも方向を与えるためには、一切を正しく判断する精神の独立、その精神によって護持せられる正しい理想の確立が必須の条件である。そして今日の日本はこれ等二つの最も大切なものを欠いて居る。従つて日本にとりて最も肝心なことも、日本精神の独立と国民的理想の確立とである。吾々はこの独立せる精神により、万世に太平を開くための具体的理想を確立して、新しい瑞穂国建立の土台固めを、先ず日本の農村に築き上げたい。私は天照開闢の道から再出発することが、日本再建の最も正しい且つ最も効果的な道であると信ずる。

SAMPLE
Shoshi-Skinsui.com

市ヶ谷の楽天囚人

わが刑務所の前歴

私は三度刑務所に入った。最初は未決で市ヶ谷刑務所に一年有余、二度目は既決囚として豊多摩に約一年半、三度目は巢鴨に約半年である。いっぞや私は河上博士の自叙伝を読んだが、この正直な老学者は、極めて感傷的な筆致で下獄の経緯や獄中の生活を述べて居た。当時共産党に入党して地下運動に加わる以上、まかり間違えば刑務所行きは当然のことで、博士にも最初からそれ位の覚悟はあった筈と思われるが、自叙伝を読んで見ると、下獄は全く思いがけなかった災難であったかのよう、悲憤愁嘆の情が随処ににじみ出て居る。この事は自分の経験と照らし合せて、

私にはやや意外に思われた。私はその他二三にさんの人々の獄中記を読んだが、いずれも私が味わわなかった憤慨や悲痛の感情が全篇に周流して居る。尤も河上博士の自叙伝以外は、みな私より遙に年少な人々の獄中記である。二十代と四十代とでは、人間の感情の迸る対象も違い、従ってその種類も強弱も違う筈である。私は五十歳近くなつての入獄であるから、下獄に際しても、また獄中に於ても、二十代の人々のように異常に激しい憤激や悲嘆を感じなかつた。

勿論私とても喜び勇んで刑務所に入ったわけではない。五・一五事件は非合法的行動ではあるが、刑務所は決して好ましいところでないから、行かずにすめばこれに越したことはない。例えば今度の造船疑獄のように、世間よと悉く違法行為があると信じて居る人々でも、検察庁の喚問さえも受けずにすむこともある。但し私は大政党の幹事長でも政務調査会長でもなかつたから、そうは問屋がおろさなかつた。そして一旦判決が下り入獄が決まつた以上、もはや否やも応もないことであつて見れば、河豚を食つて中毒したと同様、自業自得と諦める外はない。それ故私は早速諦めをつけて、謂わば気の向かぬ旅行にでも出かけるような気持で刑務所に入った。

市ヶ谷の楽天囚人

旅行と言えば彼時私は、上野発の夜行で青森に向う途中、列車内で逮捕され、土浦で下ろされて、自動車で東京に連行されたのであるから、警視庁に着いたのは払暁のことであった。直ぐ留置所に入れられて床に就くと、連日の疲労一時に出たため、その日の午過ぎまでぐっすり眠った。そして検事の簡単な訊問の後に刑務所に送られることになったが、その時検事の好意で鰻井を寄寄せ、舌鼓を打ちながら腹ごしらえをしたことを、今でもはつきり覚えて居る。その後の取調に際しても、検事の訊問、これに対する私の答弁は、対等な紳士間の日常の応対と全く同然で、彼は平然と問い、われは洒然と答えるだけだから、他人の獄中記にしばしば書かれて居る検事への対抗意識などは毛頭起らず、一度も不快の感情を抱いたことがなかった。この検事は先頃検察庁次長を辞めた木内曾益氏である。

日本経営の刑務所回想

市ヶ谷刑務所の一年有余を、私は文学書の耽読と自叙伝の執筆とで、殆ど退屈せずにおすごした。私は獄中無為の日月を絶好の機会として、その時までの自分の生涯